

今治港ビジョン・デザイン検討委員会

第二回 委員会 議事録 概要

1 日時 : 平成 25 年 11 月 7 日 (木) 午後 3 時～午後 5 時 10 分

2 場所 : 今治国際ホテル 2 階 クリスタルホール

3 出席者 :

【委員】(26 名, 順不同, 敬称は省略)

金近 忠彦	森 敏明	池田 弘子
柏谷 増男	鈴木 茂	原 映子
村上 景一	河野 義光	宮内 裕治
赤尾 宣宏	本田 忠志 (代理)	森 恒雄
丹下 貴啓	渡邊 小百合	南條 高輝
東島 義郎	嶋倉 康夫	栗谷 美則
延本 郁典	玉井 秀昌	栗原 明彦
長野 和幸	渡辺 英徳	胡井 裕志
檜垣 達哉	阿部 宏	

【幹事長及び部会長】(3 名, 順不同, 敬称は省略)

香川 泰良	上羽 博人	甲斐 朋香
-------	-------	-------

【事務局】(16 名)

海野 敦	高橋 健和	池田 忠継
中濱 和人	曾我部 通	北村 則男
山本 晋輔	若宮 浩	重松 義文
細見 博也	越智 浩	村上 留実
赤瀬 貴弘	織田 将秀	中村 平
廣瀬 正直		

4 欠席者 : (2 名, 順不同, 敬称は省略)

森 伸一郎	豊嶋 博
-------	------

5 開会等

➤ 開会

➤ 港湾管理者あいさつ

(長野和幸今治市副市長あいさつ)

➤ 委員の紹介

(異動者のみ紹介)

➤ 委員長あいさつ

委員長 : (あいさつ)

6 議事

➤ 資料説明

事務局 : (資料説明)

部会長 : (内・外貿物流部会 討議の報告)
(内港まちづくり部会 討議の報告)
(防災対策部会 討議の報告)

防災対策部会については、部会長欠席のため事務局より説明

幹事長 : (幹事会討議内容の報告)

事務局 : (資料説明)

➤ 討議

A委員 : 人流・物流をより使いやすくなっただきたい。人流の観点については、結節点としての機能強化ということで検討しているようなので、しっかりやっていただければよい。物流の観点については、ハード面についてはしっかり計画をやっていただければよいが、ソフト面について難しいところもあるなかで今治港港運協会へ2点要望させていただく。

1 点目は、協会としてより使いやすい港とはどうあるべきかということを考えていただきたい。

2 点目は、防災について。今治港は津波に関しては比較的安心であるように感じるが、揺れに関してはかなり揺れるということなので、産業面・物流を早く復活しないと地域の活力がそがれることになる。港の荷物を動かす港運の方々には、揺れへの対応をできる限り早くとっていただきたい。とくに、貨物を扱っている倉庫内の荷崩れや特殊な機材が壊れると復旧時間を要することになる。

委員長 : 使いやすい港づくりといった観点と防災、とくに揺れに対しての事業継続性といった観点であった。事務局と港運協会に答えていただきたい。

事務局 : 今後、多目的利用といった規制緩和という面を考慮しながら柔軟な港湾施設の利用を検討していきたい。

港湾施設に対する地震の調査などは行っているが、港運業者の方々の荷物に対する防護のようなものは、今後お願いしていきたい。

B委員

： 使いやすい港ということであれば、今治港の近くに倉庫が少ないので建設していただければ使用する。倉庫によって、発荷物に対しての保管、鋼材関係に対して野積保管状態による発錆の改善もできるようになる。

将来的なビジョンとなれば、示されている超長期案のようなものは考えにくい。ものを集めることも必要であるが、ものをつくり輸送する荷物を発生させる企業を誘致することが最も重要だと考える。

委員長

： 県内の製造品出荷額は伸びているなかで、今治港の取扱貨物量が減っているという実態がある。その背景には、陸へ逃げている、あるいは、近隣諸港へ逃げている、そういうことを踏まえて考えるべきだとの指摘。

事務局

： ご指摘いただいたところも含めて検討する。

C委員

： 全体的なコンセプトワードを掲げているが、平易な日本語で副題を付けたらどうか？物流・防災面では、かっちりやっていたらいけないが、まちづくりの部分では多様な人々に関わっていただかないといけない。コンセプトワードはいろんな意味を集約してのものだが、楽しさのあるわかりやすい言葉であれば多様な人々に関わっていただくのによいと思われる。

「長期～」の、瀬戸内海一帯となった地域間の連携協定は、短中期で取り組んだ方が追い風だと考える。閉幕をした瀬戸内国際芸術祭も岡山と高松の連携で行った。愛媛と広島でも広域観光という動きもある。海というのを、隔てる海ではなくつながる海という動きがあるので、あまり時間を置かないでやっていただくことを検討していただきたい。

委員長

： コンセプトワードが少し硬い感じなので、副題をつけてわくわくするような要素、まちづくりとか活性化という要素もいるのではないか。

追い風なので、観光とはまちおこしというのは、短中期で考えたらどうか。

この2点についてお答えいただきたい。

事務局

： 副題として、もう少し分かりやすい言葉を検討する。

瀬戸内海一帯となった地域間の連携については、前倒しでやるべきだと思われる。「取り組む」と「連携できる」は別にして、位置付けを考えていきたい。

D委員

： 平成40年、今後15年の予測のように、大幅に人口が減ることであれば、地域の活力を維持するのはやはり観光による交流人口を増やすことが非常に大きなテーマになってくると思っている。

今治は非常に多くの観光資源があるが、交流人口を増やしていこうとすると本格的な観光の体制づくりがいる。中心市街地再生協議会だけでなく、全

市的に合併以前の旧町村の関係者だとか、テーマごと、たとえば丹下健三建築に係る者、それから来島海峡の魚といった食という切り口やお祭りといったそれぞれの団体、こうした方々がそれぞれに活動している状況から全部統括するようにする。そして、クルーズ船の案でいえば、クルーズ船の運航会社にいつの時期が来れば今治ではこういう楽しいことができますよというような年間を通したイベント・観光に結びつけるようにする。

観光客を全国あるいは海外から呼んでくるためにはどうしたらいいかなければ、先に述べたような取り組みを行い、PRもするしサービスもおもてなしもするといった体制づくりをする必要がある。

事務局

： 観光に重点を置き、市を挙げて振興していかなければならない時期にきていると思っている。

E委員

： 観光だけを考えてくのはいかがなものか。今治としては、ものづくり産業を母体にした暮らしをして、住んで楽しい思いをできるそういうまちであればいいのではないかと。全般的に人口が減ることに対して悲観的な見方をする人が多いが、ヨーロッパの都市はほとんど人口が減っている。人口が増えているのは、アフリカが一番であとは東南アジア。こういうまちがいいのか、ヨーロッパのまちの方がいいのか。人口が減っていても、所得が高く人々が快適に暮らせればいいのであって、必ずしも観光一辺倒にならなくても、今治市民がここで快適に豊かな暮らしができる地域であってもいいのではないと思う。単純な比較かもしればいが、愛媛県内全体の観光売上高はIRCの調査で800億円。今治の船主が稼いでくる外航船舶の収入が3,000億円。そこから落ちるお金の割合は、船舶の場合わずかしかないだろうと思われるが。何もすることがないところであれば観光にかけなければならないが、今治はそうではない。しかし残念ながら今治港はオールドポートなので、世界の最盛期を過ぎた港町というのがどういう生き方をしているかというのは少し検討されてはどうか。

もう1点。防災の今の捉え方として、この地域が災害を受けたときにどうするかということの観点で分析されているが、四国全体としては南海トラフ地震が発生したときに南四国側は壊滅的になる。そこに対しての支援を瀬戸内海側からしなければならぬので、その支援拠点として位置付けられるかどうかということを検討していただきたい。

委員長

： E委員の後段の広域防災ということでご意見をいただきたい。

F委員

： 南海トラフ地震が発生した時の四国全体のアクションプログラムというのを進行中である。そのなかで、今治港が果たす役割というものも明確になってくるとと思われる。基本方針は出ており、太平洋側に各港からフェリーなどを使った輸送と内陸から国道といった東北のくしの歯作戦のような形態をイメージしている。

G委員

: 関係者に集まっていただき、四国の地震・津波対策はどうあるべきかを検討してきた。基本方針とアクションプログラムといったものは既に公表されている。瀬戸内海側を支援基地として太平洋側を受援基地としてどのように行っていくのかといったものについては、広域輸送ワーキンググループを行い、これからも引き続き検討してくということ、まだまとまっていない状況である。

大規模地震が発生した場合、恐らく日本中が被災していると思われるので、全国から四国を支援していただけないかということも恐らくないだろう。当分の間は、四国のことは四国で耐えることになるだろう。そういったことを想定しながら検討しているので、F委員から説明があった方向でまとまっていくと思われる。

委員長

: 説明があった内容と今のアクションプランも含めて、考慮しながら取り組む必要があると思う。

E委員の前段について、総合政策あるいは産業政策というようなところでご意見をいただきたい。

H委員

: 定住人口を増やすということは大変重要で、今治市で取り組んでいる。ただ、定住人口を増やすというのは全国的にも非常に難しく長期に渡ると考えている。

今治市は製造品出荷額を見ても、造船・船用産業、タオルといったものづくりのまちである。広域となった今治の課題というのは、少子高齢化が進むなかで、ものづくりに力をいれていきつつ観光・交流を増やすことによる雇用の場だと思っている。

皆様のご意見をいただくなかで、まちづくりにつながり基盤となる港づくりが必要である。

D委員

: 今治の強みは、やはり製造業が競争力を持っていることと思っている。決して製造業はいらないと申し上げているのではない。ただどうしても製造業だけだと就業構造が単純化してしまい、女性などの雇用の幅が狭まってくる。そういう意味では、観光産業はある意味サービス産業なので、雇用の多様化、それから、個人経営的なものも観光産業では存在できるという点でこれから重視し、製造業と農業、製造業と観光というものを柱にして地域を支えていくことが大事ではないかと思っている。

参考までに、国際的にかつて造船産業が集積していたイギリスのグラスゴーでは、現在その産業の競争力を失っているため、文化・芸術で夏一ヶ月間サマーフェスティバルをして、観光で人を呼んでいる。スペインのビルバオでは、製造業の競争力を失ったので、その工場跡地を再開発し、現代アートの美術館をつくり世界中から観光客を呼んでいる。今治はまだそこまでやらなくても製造業の競争力がある。今のうちにそういう魅力的な

まちをつくっていくことで、多様な人がここに集まってくる。そして製造業・造船業にもよい影響を与え、色々な研究開発やデザインなど新しい知的な刺激が必要とされるようになる。人が集まり、造船業・製造業に携わる人も知的な刺激を受けるようなまちづくりをすることで、相乗効果が起こってくると思われる。

委員長

： 人口減少に対して住みやすいまちづくり・定住促進による人口減少の防止、若い人に住んでもらう・誘致するための、政府の方針で待機児童ゼロ作戦なども行っているが、これらを基本にしながら産業を大切に、活性化していく。そして、産業の一つとして観光という考えを取り入れる。

K市などでは、新しい産業誘致をしているが、古い産業・伝統的な産業を産業観光・産業遺構といったかたちで一つのまちおこしの材料としている。諸外国の事例紹介もあったが、ぎらぎらした観光というよりも歴史や伝統・まち並みなどを活かして人を誘致する観光がよいのではないか。

I 委員

： まちの人口を増やすということは大変大事なことである。そのためには、企業誘致、大学誘致、究極は合併といったものが必要である。今治も 10 年前は、12 万人都市であったが、市町村合併により 17 万 8 千人になった。観光は、経済効果も非常に有効である。この近郊では、尾道市と松山市は非常に観光を有効に利用してまちづくりに成功している。今治市も最近話題が多く、パリエさん、焼豚卵飯、サイクリング、タオルがあるが、人口は減少傾向となっている。観光という語源は、自分のふるさと・住んでいるまちを誇りに思っ自慢をるところからきているので、観光に行政も我々もこれから力を入れることによって、そのまちが豊で他の地区から行ってみたい・住んでみたいというような環境をつくるべきだと思っている。

今治の港が寂しくなったのは、以前は大型フェリーが 3 航路も就航していたが、九州～京阪神航路のフェリーが完全に廃止されたこと、島しょ部のフェリーも現在は大三島と関前しかない、渡海船もほとんど来ない、そういったことが港の潤いを消した非常に大きな原因だろうと思っている。この際、京阪神～九州航路のフェリーを関係官庁、民間が力を合わせて何とか復活させていくことが今治市と港の活性化につながると思っている。そのような運動や実現に向かっての目標ができればよいと思っている。

何年前に海の駅の指定を受けたが、あまり活かされていない。これは、PR 不足とヨットマンに対してあまりサービスがなされていない結果だろうと思われる。これらの改善を考えていきたい。

最近、非常に多くのサイクリストが訪れるようになった。ここ数年のうちに、港には交流館が完成するので、サイクリストが休憩できシャワーも使えるようにすることで、港ににぎわいの一端になると思われる。

委員長 : 資料のなかには、関西方面はあるが九州方面は記載されていない。ヨットマンに関する内容も触れられていない。事務局に意見を求めたい。

事務局 : 旧フェリーについては廃止ではなく休止なので、打開に向けて情報収集などを行いながら努力していきたい。

ヨットマンに対しては、みなと交流センター建設のなかで対応を考えていると聞いている。

J委員 : 他港においても、港湾整備、コンテナ輸送と様々な取り組みをされている。少子高齢化など同じ問題を抱えているなかで、どこで差別化を行い、どのような仕組みづくりが必要なのかを考えさせられる。最終的には人がどれだけ豊かであるかであり、ソフトの部分をきめ細かくやっていくことで差別化をする、こういうことだろうと思われる。

今治の歴史・文化を掘り起こしてみる。海運で栄えたまちであったが、渡海船がなくなってきたことで港周辺の商店街が活性化しなくなった。高度成長期前に小さな船に人と物を載せて、人の行き来があり、交流が生まれ地元の人たちの生業・商業が潤っていた。いつの間にか船が大型化し、しまなみ海道や高速道路というところで輸送をするようになった。今後はエネルギー問題なども含め、ハードだけでなくエネルギー効率のよい海運をもう一回見直すことで活性化に繋がっていくと思っている。

7 閉会

事務局 : (あいさつ)

午後 5 時 10 分 閉会